

静大初の『キャリアデザイン』からキャリア教育を考える

佐藤 龍子

1. はじめに

この間、初等・中等教育はもちろん、急速に大学においてもキャリア教育が広まってきている。その背景として、高等学校から大学への接続問題があり、一方で大学から社会への接続問題があると考えられる^①。

一つには大学の「入口」に関わって、高校生の意識変化と大学への進学率の上昇に伴っての生徒から学生へのスムーズな「移行」が困難になっていることである。この状況は、高校と大学の教育接続の必要を喚起している。あわせてデマンドサイドである大学に対して、受け入れた学生に新たな初年次教育プログラムを提供することが喫緊の課題であることを明らかにした。

もう一つは大学の「出口」に関わって、大学と社会の接続に於ける「教育から仕事への移行」の困難という問題である。

そこには、①大卒の無業者が 23.55%に達している（平成 15 年度学校基本調査）、②フリーターが 400 万人以上、ニート（NEET：Not in Education, Employment or Training）が 85 万人以上を数える、③大卒の 3 割が 3 年以内に離職している、などの現実がある。

上記の現実とともに、90 年代から顕著になった企業の新卒採用抑制と新卒採用の厳しさ、一方でシュウカツ（就職活動）の「諦めの早さ」など若者の意識変化、また日本が今「一億総中流から階層社会へ」と評される社会構造の変化も見ておく必要がある。

しかし、ここで原点に立ち返るなら、大学のミッションとして、学びの最終段階にいる学生を社会に送り出す役割があることを再認識しなければならない。大衆化した大学にとって、どのようなキャリア教育が必要なのかを考えることは、大学の責任でもある。

本稿では、これらを踏まえながら、静岡大学における「キャリアデザイン」（2005 年開講、教養基礎科目、1 年生）の実践について述べていきたい。

2. ユニバーサル・アクセス時代の大学と初年次（導入）教育

高等教育の成長は、少なくとも 3 つのことなる形であらわれると、マーチン・トロウ（1976）は述べている。第 1 は高等教育在学者数などの「成長率」、第 2 には、個々の高等教育機関の「規模」、第 3 は、高等教育機関在学者の「該当年齢層に占める比率」の変化である。

マーチン・トロウは、大学進学率が 50%を超えることを、ユニバーサル・アクセスと言ったが、日本の大学進学率は、2005 年はじめて 50%を超えた（大学 44.2%、短大 7.3%）。マーチン・トロウは、進学率 15%までのエリート型の大学は、「人間形成・社会化」の場であり、進学率 50%までのマス型大学は、「知識・技能の伝授」の場であるとした。ユニバーサル・アクセス型の大学は「新しい経験の提案」が必要だとしている。

「学生数の増大とユニバーサル高等教育への移

行は、多くの学生に大学への就学をしだいに義務と感じさせるようになり、かれらはますます『自分の意志からでなく』就学する存在となりつつある」(マーチン・トロウ、1976)。

日本においても、10年ほど前からユニバーサル化が進行しているといわれてきた。「大学生は一人前の大人である」という認識は、崩れつつある。

日本では、ユニバーサル・アクセス時代の到来と若年雇用の厳しさが同時期に重なり、問題はますます深刻かつ複雑になっている。将来に対する不安はどの時代の若者も持っているが、この15年余りは、経済や雇用環境、特に若年雇用の厳しさから、現実味を帯びた切実な厳しさになっている。安易に衣食住の満ち足りる時代であればこそ、なおさらである。

若者の自立は「親掛かり」と「会社頼み」という性格を強くもつことになった。自立できるまではもっぱら親の責任に委ねられ、すみやかに「会社」へ参入することでようやく自立へと一步を踏み出すことができた。これが、日本の若者の自立に関するコンテキストであった。しかし、若者たちが、これまでの世代がたどってきたような行程を踏まなくなったのである(宮本、2002)。

そうした中、高等教育において、大学1年生を対象にした「初年次教育」「導入教育」が多くの大学で実施され、定着しつつある。

この背景には、大学のユニバーサル化の問題や学生文化の変化などが挙げられる。学力が低下しただけでなく、学ぶ意欲を喪失した学生が入学してきている。「生徒」から「学生」に円滑に移行するためには、大学側の意図的な仕組みや仕掛けが必要な時代になってきたと言える。

初年次教育、導入教育は、アメリカで、First Year Seminar, First Year Experiences (FYE) と呼

ばれていたものを訳したものである。同志社大学の山田礼子がFYEを導入教育と訳したと言われている。初年次教育、導入教育も同じような意味で使用されていて、まだ統一した呼称はない^②。

初年次(導入)教育は、「移行(transition)問題」を背景にしている。「移行」とは、「高校から大学へ」「大学から社会人へ」など、ある発達段階から次の発達段階への転換期において、新しい環境への社会的適応を図ることである。濱名篤によれば、日本の大学中退者は約11%程度ではないか、4年卒業率もH4年82.3%、H6年81.9%、H8年80.1%、H10年79.0%と漸減傾向が認められる、大学新生の「移行」には大きな問題が内在化している、とのことである^③。

アメリカの大学では、初年次教育は非常に重要であり、初年次教育政策センターとアメリカ州立大学協会の共同プロジェクトとして、初年次教育プログラムプロジェクトが進められている^④。

日本私立大学協会附置・私学高等教育研究所が、全国の私立大学の学部長に「1年次教育に関する調査」を行った。その際の「導入教育の定義」は以下である^⑤。

- A. 補習授業(大学での学習・研究の前提として必要で、かつ本来高等学校までの教育において当然習得すべき内容の教育)
- B. スタディ・スキル(一般的なレポート・論文の書き方や文献の探し方、コンピュータ・リテラシー)の教育
- C. スチューデント・スキル(大学生に求められる一般常識や態度)の教育
- D. 専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育

一方、名古屋大学の近田政博によれば、アメリカの初年次教育では、①学習スキル、②時間管理、

③自己探求・自己評価・自己概念、④大学生活への移行、⑤キャリアガイダンスの5点を重視している(近田、2004)。

日本では、「フレッシュマンセミナー」「新入生セミナー」「基礎ゼミ」「基礎演習」などの名称で開講されている場合が多い。

3. 初年次・導入教育の現状

前述の私学高等教育研究所の調査によると、導入教育について、全体の82.2%が実施しているという回答。実施を予定もしくは検討中の学部を含めると91.8%になる。

導入時期は、1990年代になってからが多く、特に1996年～1998年に導入した学部・学科が多い。

学部系統別にみると、人文系学部は、大学教育への円滑な移行や高校までの教育との違いを自覚させる教育として導入教育を位置付けているのに対し、理系学部は、補習(リメディアル)授業として理解している。

日本の導入教育ではスチューデント・ソーシャルスキルに関連した内容が学部を問わず重要視されている。基本的な生活習慣や学習習慣、マナーなど従来は高等教育機関がほとんどタッチしてこなかった領域を、現在は学生に教えている。

授業内容をみると、最も多いのは「学問や大学教育全般に対する動機付け」である(40.5%)。あまり多くはないが、将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けも15.9%ある。具体的な科目名として、「職業選択とキャリア形成」「キャリアデザイン」などは、0.5%である。

前述のアメリカの初年次教育では、大きな柱としてキャリアガイダンスがあげられているが、調査結果を見ても、日本ではまだ非常に少ないことがわかる。

静岡大学でも平成8年度から大学導入科目として新入生セミナーを開講している。この科目の趣旨と目的は、「大学での勉学・研究に必要な話す・読む・聞く・書く・調べる・発表するなどの基本的な方法を養うことにある。(中略)学生生活を有意義に送るための一市民として身につけるべきソーシャル・スキル(基本的マナー)を習得することにある」。実際の講義は各教員の自主性に委ねられているため、学生の満足度には大きなバラつきがある。

4. ユニバーサル・アクセス時代の本質

誰もが大学に行く時代とは、どのような時代なのだろうか。

ユニバーサル化がすすむということは、必然的に高等教育機関の間の多様性が進むことを意味する。すべての高等教育機関について高いクオリティを保持することは、不可能と言ってもいい(マーチン・トロウ、2000)。

「ユニバーサル化とは何か」を喜多村和之(2000)は、学習者が人生のいつかの時点で高等教育の機関に進学ないしは復学していく、いわば生涯学習型、リカレント教育型の展開を意味する、と述べている。日本では、学校教育の長期化と大学・短大の「学校化」の進行がいつそう進む可能性があるとも述べている。

誰もが高等教育機関に進学する時代、いつでも高等教育にアクセスできる時代、そして生涯学習社会は、ITの進展と共に、誰もが、いつでも、どこでも学べるといういい面がある。一方、それは、「一生学び続けなければならない」というある種の脅迫観念も生む。ユニバーサル・アクセス時代の本質は、一生学び続けなければならないことにある。

大学に求められる大きな役割の1つは、学び続ける力＝「自己教育力」の育成である。学生時代にこの力をつけさせることである。キャリア教育の目標も、この自己教育力の育成である。

Employability (エンプロイアビリティ) の議論が、労働市場でこの10年あまり話題になっているが、Employabilityを形成する核は、自己教育力であろう⑥。

5. 静岡大学の卒業率・中退者の状況

前述の濱名によれば、学校基本調査から、4年卒業率は漸減傾向にあるとのことであったが、では静岡大学の卒業率はどうかであろうか。過去10年間(5年卒業率は9年)に渡って卒業率と中退者(退学・除籍・転学部等)を調べてみた。(表1. 表2. 図1. 図2. 図3. 参照)⑦

表1

| 4年卒業 | | | | | |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | 4年入学 | 5年入学 | 6年入学 | 7年入学 | 8年入学 |
| 人文学部 | 78.10% | 83.91% | 80.32% | 83.89% | 78.58% |
| 教育学部 | 89.28% | 92.59% | 89.30% | 89.13% | 86.71% |
| 情報学部 | | | | | 86.14% |
| 理学部 | 64.60% | 85.12% | 76.26% | 70.18% | 72.84% |
| 工学部 | 66.93% | 76.55% | 74.26% | 73.07% | 64.79% |
| 農学部 | 87.43% | 94.01% | 88.02% | 91.33% | 82.51% |
| 大学全体 | 77.36% | 85.28% | 81.34% | 80.88% | 76.98% |
| | 9年入学 | 10年入学 | 11年入学 | 12年入学 | 13年入学 |
| 人文学部 | 82.82% | 78.35% | 76.36% | 76.10% | 78.96% |
| 教育学部 | 88.79% | 85.33% | 86.54% | 90.53% | 89.16% |
| 情報学部 | 83.33% | 81.59% | 84.08% | 76.33% | 86.26% |
| 理学部 | 72.25% | 74.89% | 75.55% | 78.03% | 75.23% |
| 工学部 | 66.04% | 72.63% | 69.16% | 63.49% | 70.87% |
| 農学部 | 86.67% | 84.18% | 88.27% | 84.91% | 85.53% |
| 大学全体 | 78.91% | 78.55% | 78.19% | 76.50% | 79.66% |

※ 夜間主コースのぞく

表2.

5年卒業

| | 4年入学 | 5年入学 | 6年入学 | 7年入学 | 8年入学 |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 人文学部 | 12.76% | 7.63% | 10.74% | 7.47% | 12.29% |
| 教育学部 | 4.68% | 3.70% | 5.64% | 3.88% | 5.18% |
| 情報学部 | | | | | 6.93% |
| 理学部 | 16.81% | 8.37% | 8.68% | 9.63% | 8.23% |
| 工学部 | 16.14% | 10.27% | 12.87% | 10.57% | 17.09% |
| 農学部 | 4.79% | 0.60% | 5.99% | 4.05% | 6.56% |
| 大学全体 | 11.29% | 6.75% | 9.28% | 7.52% | 10.71% |
| | 9年入学 | 10年入学 | 11年入学 | 12年入学 | |
| 人文学部 | 8.21% | 11.22% | 10.91% | 11.65% | |
| 教育学部 | 4.02% | 5.62% | 7.45% | 5.01% | |
| 情報学部 | 7.84% | 7.96% | 6.47% | 7.25% | |
| 理学部 | 12.78% | 12.12% | 9.61% | 8.52% | |
| 工学部 | 14.24% | 16.52% | 12.04% | 15.47% | |
| 農学部 | 3.33% | 6.78% | 4.47% | 3.14% | |
| 大学全体 | 8.94% | 11.01% | 9.38% | 9.93% | |

※ 夜間主コースのぞく

図1

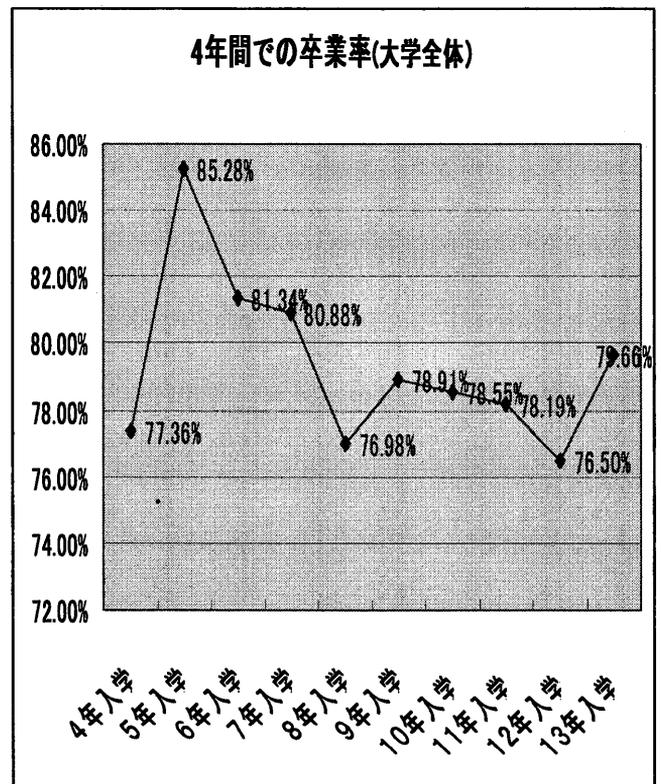


図 2.

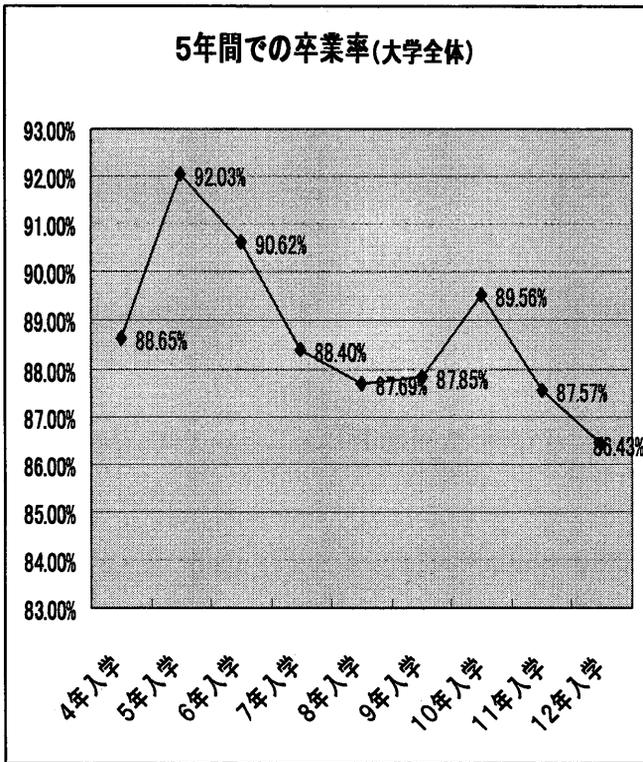
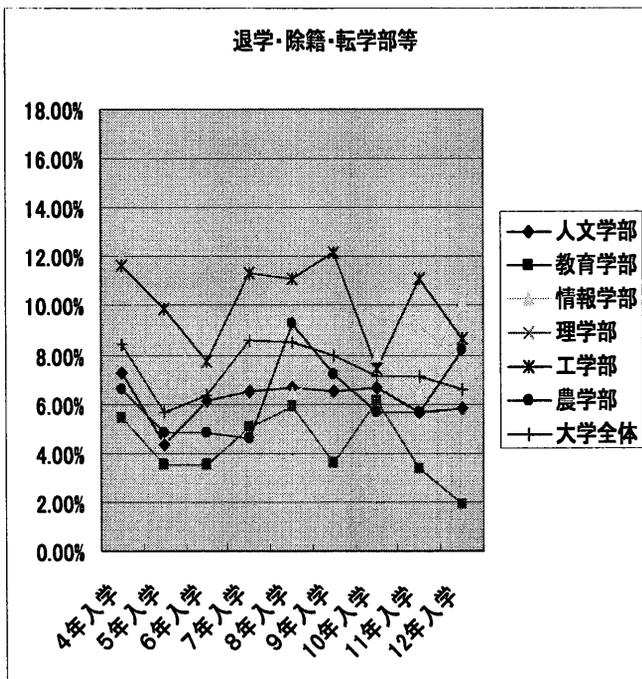


図 3.



静岡大学の4年卒業率は、一直線の右肩下がりの漸減傾向にあるとは言えない。中退率も漸減傾

向にはない。4年卒業率は、平成4年入学者で77.36%、平成13年入学者で79.66%である。静岡大学では4年卒業が8割程度ではないかと筆者は想定していたが、その通りのデータである。

ただし、5年卒業率はデコボコしながらも、漸減傾向が認められる。特に、1992年(平成4年)の入試が厳しかった頃、いわゆるゴールデン・セブンの頃の入学者は、厳しい入試選抜をくぐって大学に入ってきたためか、平成5年入学者の5年卒業率は、92.03%と高い。その後徐々に、卒業率は低くなってきている。平成4年入学者の5年卒業率88.65%に比べ、平成12年入学者は86.45%と、卒業率は2.22%減っている。平成5年入学者と比較すると、平成12年入学者は、5.6%も卒業率が減っている。減少幅が大きい。

簡単に要因を分析することはできないが、以下のような仮説が考えられる。日本の大学の7割以上が私立大学で、その3割が定員割れであることを斟酌すると、静岡大学の4年卒業率が一定であるのは、まだ選抜入試が機能していることが学生の質の担保になっていて、そのことがプラスに作用しているのではないかと考えられる。逆に、5年卒業率の減少幅の大きさは、急激に選抜入試が出来なくなってきた証拠かもしれない。今後数年間のデータを精査する必要がある。

一方、毎年6%~8%(平成11年入学者の場合、昼間部実数で145人)もの学生が、退学・除籍・転学部等をしている。紙幅の都合で、今回データは掲載していないが、転学部・転学科の学生は非常に少ない。ほとんどが退学である。退学のうち、他大学受験などのいわゆる仮面浪人や進路変更も多いが、「一身上の都合」も多い。例えば、平成11年度入学者の場合、「一身上の都合」が43人、「進路変更」50人、「他大学受験」34人である。

平成12年度入学者の場合、「一身上の都合」が49人、「進路変更」40人、「他大学受験」22人である。

「進路変更」と「他大学受験」の多さは、不本意入学者の多さを物語っている。「一身上の都合」の学生の中には、意欲を持って起業した学生もあるかもしれないが、多くは退学後の状況が不明である。中退者のうち、ニート、フリーターになる学生も多いのではないだろうか。今後追跡が必要である。

希望を持って入学した学生が、毎年100人以上大学を去るという事態を深刻に受け止めなければならない。キャリア教育の意義の1つは、この辺りにもある。国立大学法人も、卒業率はもちろん、中退・休学問題を正面から見据えなければいけない時代に突入している。

カレッジマネジメント126号によれば、「男女とも理科系の退学率が文科系よりも高く」なっている。理系は、積み重ねの学習が多く、途中でわからなくなると、そこから先に進めなくなってしまうと同書は述べている。静岡大学のデータも同様である。

山田昌弘(2004)は、戦後日本の教育をパイプラインに例え、「あるパイプラインに乗っているはずが、いつのまにか、パイプラインにできた亀裂から漏れてしまい、下に落ちていく生徒、学生が出てきた」。「パイプラインに亀裂が生じ、パイプラインから漏れてしまうという『リスク』が発生し、『運よく、もしくは、実力によって』パイプラインを流れ続け、相応の安定した職に到達する人と、パイプラインの途中で漏れてしまい、『卒業という事実』を生かせず、アルバイトなどにならざるをえない人との間での格差が広がっているのでは」と述べている。

6. 静岡大学の「キャリアデザイン」

さて、静岡大学では、今年度(2005)から、「キャリアデザイン」(教養基礎科目・1年生)を開講し、筆者が担当している。この授業は、初年次(導入)教育を意識した授業で、勤労観・職業観を前面に打ち出したキャリア教育ではないが、学びの最終コーナーにいる学生にとって、働くことを射程に入れられるような内容になっている。

シラバスの授業のねらい・目標は『生徒』から『学生』になったばかりですね。その違いはなんでしょうか?大学で学ぶことと将来をどのように考えていますか?…受け身の姿勢でなく、自立的な学生生活を送れるようになることがこの授業の目的です」。

前述の調査区分の、③スチューデント・スキルにキャリアガイダンスをミックスし、「生徒」から「学生」になる橋渡しを意識し、その仕掛けを随所に盛り込んだ内容である。

授業の概要は以下の通りである。

- ①「キャリア」ってなんだろう?
- ②「生徒」から「学生」へ
- ③大学って何だろう?
- ④静岡大学を知ろう
- ⑤大学での学びと成長
- ⑥人はなぜ働くのか
- ⑦社会と職業
- ⑧日本の産業と世界
- ⑨コミュニケーション力
- ⑩人生を切り拓いていく能力とは
- ⑪自分を知ろう
- ⑫自分を伝えよう
- ⑬チームワークの大切さ
- ⑭プレゼンテーション

学生たちの反応は、非常に好評である。前期

(静岡) 最終回の感想文の一部は以下である④。

「この『キャリアデザイン』を受けて、入学当初は漠然としていた『大学』というもの、これからの自分の人生をどうやっていくか、大人の常識などなど、14回の講義以上のものを得られたような気がします。先生には本当に感謝しているし、この講義をとってよかったと思っています」。

「今日で、キャリアデザインの授業が終わってしまうが、この授業で得たものは沢山ある。私は社会への興味・感心が非常に薄かったが、新聞を読むようになって自分と深く関わる問題ばかりがニュースになっていることに気づいた。また、他学部の人と友達になれたことも、この授業で得たものの中で大きい」。

「授業で、キャリアデザインとはこれからの自分をデザイン、設計していくことだと学びました。(中略)私にとっては高校4年生から大学1年生になるための大きなステップになりました。今では全ては自ら行動していかないと損なのだと考えるようになりました」。

「シラバスを読むとプレゼンがあるから、この授業をとるのをやめようと思っていた」学生が何名もいた。しかし、1分間自己紹介、ブレインストーミング、コミュニケーション技法などの授業を通して、コミュニケーションをとることの楽しさを知り、約半数近くの学生が、自己紹介をしたと自発的に挙手をしてくれるようになった。

後期(浜松)では、最終の授業時に、簡単なアンケートを採った。以下はそのアンケート結果である。

- ① 対象：キャリアデザインの受講者(工学部・情報学部の1年生)
- ② 方法：授業中にアンケート用紙配布
- ③ 時期：2006年1月31日

④ 回収：回答者数42人(当日受講者の100%)

表3.

| 変化したこと | 人 | % |
|-------------------------------------|----|------|
| 1. ノートをとるようになった。 | 15 | 36.8 |
| 2. 本を読むようになった。 | 19 | 46.3 |
| 3. 新聞を読むようになった。 | 14 | 34.1 |
| 4. 予定(週間、1ヶ月、1年間、4年間etc)を立てるようになった。 | 5 | 12.2 |
| 5. あいさつをするようになった。 | 8 | 19.5 |
| 6. 図書館を利用するようになった。 | 5 | 12.2 |
| 7. 一般常識を身に付けようと思うようになった。 | 25 | 61 |
| 8. 大学生としての自覚を持つようになった。 | 22 | 53.7 |
| 9. 大学4年間の過ごし方を考えるようになった。 | 26 | 63.4 |
| 10. 将来のことを考えるようになった。 | 24 | 58.5 |
| 11. 学ぶ意欲が高まった。 | 17 | 41.4 |
| 12. 人の話を聞くようになった。 | 18 | 43.9 |
| 13. 自分のことを相手に伝えられるようになった。 | 14 | 34.1 |
| 14. コミュニケーションの重要性を意識するようになった。 | 39 | 95.1 |
| 15. 社会に関心を持つようになった。 | 23 | 56.1 |
| 16. 多様なものの考え方を認めるようになった。 | 16 | 39 |
| 17. 具体的な行動()を起こすようになった。 | 3 | 7.3 |
| 18. その他 | 2 | 4.9 |

※複数回答可

表4.

| 変化しなかった理由 | 人 | % |
|-------------------------|---|-----|
| 1. 授業が期待していたものを違っていたから。 | | |
| 2. そもそも授業には期待していないから。 | | |
| 3. 大学には期待していないから。 | | |
| 4. 授業で何かを得ようとは思っていないから。 | | |
| 5. 学ぶ意欲がないから。 | 1 | 2.4 |
| 6. 欠席が多いから。 | | |
| 7. 遅刻が多いから。 | | |
| 8. 授業を受け身で聞いていたから。 | | |
| 9. なにも考えていないから。 | | |
| 10. 自分の性格から。 | | |
| 11. その他() | | |

授業を受ける前と受けた後で変化したことがあると回答した学生は、42人中41人で、変化がないと回答した学生は1人であった。

変化が大きかったものの上位5つは、「コミュニケーションの重要性を意識するようになった」(41人中39人、95.1%)、「大学4年間の過ごし

方を意識するようになった」(41人中26人、63.4%)、「一般常識を身に付けようと思うようになった」(41人中25人、61%)、「将来のことを考えるようになった」(41人中24人、58.5%)、「社会に関心を持つようになった」(41人中23人、56.1%)である。

低かったものは、「予定(週間、1ヶ月、1年、4年)を立てるようになった」(41人中5人、12.2%)、「図書館を利用するようになった」(41人中5人、12.2%)である。

17の具体的な行動では、「有料講演会に参加」「作文を書く」「手帳にメモをとるようになった」などの記述があった。18のその他では、「自己について考えるようになった」「時間を大切にしようと思った」の記述があった。

この授業を受けて変化したと回答した学生は、18項目のうち、平均7つ以上(7.2)〇をつけていた。

この授業を受けて変化がないと回答した学生は1人で、「学ぶ意欲がないから」と回答していた。浜松キャンパスでは、受講生の9割が理系である。1年次で「学ぶ意欲がない」と答えた学生が1名というのは、少ない。来年度以降静岡キャンパスとの比較が必要である。

無記名とはいえ、授業中に配布したアンケートで、かつ最終授業だったので、若干のご祝儀相場もあったかもしれない。やや誘導尋問の質問項目もあったが、予想以上に授業の「効果」がわかるデータとなった。

コミュニケーション力は、授業としては1回だが、毎回の自己紹介、数回のブレインストーミングとプレゼン等を行ったことにより、授業担当者の意図以上に学生には効果的だったと考えられる。当初は、「人と話すのが苦手」「プレゼンは嫌い」

「人見知りする」という学生が多かったが、人間関係の基本と少しだけスキルを教えれば、授業中に学生は生き生きとグループで話し合えるようになった。14回の授業を通して、自分の成長を実感したのだろう。感想文にも以下のコメントがあった。

「グループを作るのもかなり自然に出来たことに成長を感じた。また、プレストをするときも堂々としている自分がいました。周りには人がおり、お互い刺激を受け合い、常に成長しているのだと痛感しました。これからも、人と人とのつながりを大切にし、常に進化し続ける自分でいたいと思いました」。

最終回の感想文には、「変化」についてのコメントが多かった。

「このキャリアデザインを受けて、本当に自分が変わってきたなあと思う。今までまったくやったことのないことに挑戦しようと思ったし、自分のことをよく考えるようになった。最後までしっかりこの講義を受けられてよかったと感じる」。

「このキャリアデザインを受けて、本当に色々なことを教えて頂くことができました。ありがとうございます。一番自分の中で変化があったと思うことは、『変わろう』という気持ちが強くなったことです。…『変化』を求める気持ちが授業に出れば出るほど強くなってきて、今では冬休みはいかに自分を高められるかっていくつか予定を組んだりしています」。

一方、「学ぶ意欲が高まった」の項目が、担当者の予想より低く、学びのモチベーションアップにはあまりつながらなかったのか、疑問が残る。ただ、それ以外の意欲を尋ねた項目(例えば、4年間の過ごし方、将来のこと、社会への関心)などは高かったので、学ぶ意欲を専門科目と捉えられ

かもしれない。検討課題である。

7. おわりに

静岡大学に入学してくる学生の多くは、普通科高校出身で、キャリア教育をあまり受けていない。将来の見通しや職業を考えるとなく大学を受験し、まさに高校4年生として大学に入ってくる。その実態は、「進学」というよりは「進級」に近い。期待感は大いものの、どのように過ごしていいかわからない学生も多い。

意欲の高い1年次に、大学で学ぶことが自分の生き方やキャリアにどのような意味を持つのかを考えることは、大学4年間の充実、ひいては人生設計にとって重要な意義がある。そして、生徒と学生の違いを認識し、その射程に働くことを捉えることが、導入（初年次）教育の一つの目標である。

「キャリアデザイン」の授業を担当してみて、1年生は、「打てば響く」と実感した。「鉄は熱いうちに打て」である。

ベネッセ教育総研の「学生満足度と大学教育の問題点」（2004年版）によれば、「低学年ほどインターンシップやキャリア教育への期待は強く、取り組むことで満足度も他の学年に比べやすい」。授業を担当した実感と同じ分析がなされている。

ニート、フリーターはもちろん、大学中退者を含む問題状況は今後ますます深刻化する可能性がある。高校生の約50%が大学・短大に進学する時代である。大学全入時代を向かえ、不本意入学者も多くなる。様々な手をつくして入学者を確保しても、休学者や中退者が多くなれば、大きな問題である。

キャリア教育は、実践の学問である。理論だけでは、今ここにいる学生に答えられないし、理論

的裏付けを欠く実践だけでは、自己流のキャリア教育になってしまう。理論と実践が融合してこそ、キャリア教育といえる。

そのためには、単にキャリア教育や「キャリアデザイン」の授業だけでなく、一人ひとりの教員が、学生の将来をどのように考えて学生に接し、日々の授業を展開するのかが、いまこそ試されているのである。

同時に、大学全体としての組織的な取り組みも不可欠である。「大学におけるキャリア教育のあり方」（国立大学協会）も、「今や、学生のキャリア形成支援の取り組みを、あらためて大学教育の基本的目標として位置づけ直す必要がある」「キャリア教育の検討にあたっては、大学教育における責務のひとつとして考え、全学教育理念や教育体系の再構築と位置づけて進めることが望ましい。全学的にビジョンを共有し、考え方が明確になれば、仕組みづくりや予算措置も整いやすい環境になる」と明確に書いている。

ユニバーサル化した現在の大学は、大学と言っても一言ではくくれないほど、多様である。授業内容も、在籍する学生も、大学によって非常に異なる。大学のミッションも異なる。導入教育もキャリア教育も、その多様性を認めながら、各大学で深化していくのではないかと考えている。

【注】

① キャリアやキャリア教育の定義は、非常に難しく、その範囲や内容について議論がある。100人研究者がいれば100通り定義がある。キャリアの定義を、ここでは、ひとまず「一生を通じた、職業経歴も含めた生き方の追求」としたい。

日本進路指導学会(現・日本キャリア教育学会)「進路指導の定義」(1987)は、「キャリアとは、ひとりの人が生涯にわたって踏み行き形成する職業経歴の全体をいう」と定義している。なお、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(2004年1月28日)によれば、キャリア教育とは、「一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」となっている。

- ② 同志社大学第1回教育開発センター講演会(2005,2,25)「卓越性の基盤を構築する—1年次の経験」講演要旨
- ③ 2005年大学教育学会課題研究集会(新潟大学)「初年次教育・導入教育のアイデンティティーキャリア教育と学士課程教育との関係を考える」での報告と資料。
- ④ 名古屋大学高等教育研究センター第36回招聘セミナー(2004,3,1)「初年次教育における教育評価とポートフォリオ活用」講演要旨
- ⑤ 日本私立大学協会附置・私学高等教育研究所・調査報告書「私立大学における一年次教育の実態—『学部長調査』(平成13年度)結果から—」(2003年6月)
- ⑥ **Employability** (エンプロイアビリティ) — **employ**(雇用する)、**ability** (能力) をあわせたもので、直訳すると「雇用する能力」となるが、雇用される人の能力を問う言葉として使われている(森清「仕事術」)。「雇用可能性」とも言う。日経連(現日本経団連)教育特別委員会が1999年4月「エンプロイアビリティの確立をめざして—『従業員自立・企業支援型』の人材の育成を」という報告書を出した。それによると「エンプロイアビリティを『雇用される能力』すなわち『労働移動を可能にする能力』に『当該企業の中で発揮され、継続的に雇用されることを可能にする能力』を加えた広い概念でとらえ」た上で、「従来の企業と従業員の関係を『企業・従業員相互依存型』と定義し、これを今後『従業員自立・企業支援型』に変化させることが重要であるとした(久本憲夫「正社員ルネッサンス」)。
- ⑦ 正確な中退率の算定は、実際には非常に難しい。今回は、中退・除籍、転学部等を合わせた数字になっている。カレッジマネジメント126号で濱名篤は以下のように述べている。「(中略)正確には、“中退率”とは言わず、『中退者の割合』となっており、中退者数÷総在籍者数×100で求められている。この調査方法では、授業料を完納したうえで退学願を提出し、公式に(通常、教授会での審議で)認められた退学者だけが対象になり、前納の授業料が完納されない状態で大学を去る除籍者は含まれない」。

⑧ 毎回、授業終了直前に感想文を書いてもらっている。その感想文に筆者がコメントをつけて、「キャリアデザインの広場」を作成し、翌週の授業開始時に配布している。

[参考・引用文献]

- 1) マーチン・トロウ(1976)「高学歴社会の大学」(天野郁夫・喜多村和之訳) 東京大学出版会
- 2) マーチン・トロウ(2000)「高度情報社会の大学」(喜多村和之編訳) 玉川大学出版部
- 3) 宮本みち子(2002)「若者が《社会的弱者》に転落する」 洋泉社
- 4) 山田礼子(2005)「一年次(導入)教育の日米比較」 東信堂
- 5) 近田政博(2004)「初年次教育の日米比較—特質と課題—」『大学教育学会誌第26巻第1号』
- 6) 山田昌弘(2004)「希望格差社会」 筑摩書房
- 7) 森清(1999)「仕事術」 岩波新書
- 8) 「カレッジマネジメント126号」(2004)リクルート
- 9) 佐藤龍子(2005)「国立大学法人の中期目標・中期計画にみるキャリア教育と就職・学生支援」同志社大学「社会科学」第75号
- 10) 佐藤龍子(2005)「導入教育としての『キャリアデザイン』の試み」日本キャリア教育学会第27回研究大会論文集
- 11) ベネッセ総研(2005)「2004年版学生満足度と大学教育の問題点—全国4年生大学調査より」 ベネッセコーポレーション
- 12) 社団法人国立大学協会、教育・学生委員会(2005)「大学におけるキャリア教育のあり方」

謝辞：卒業率等のデータについて、教務課世古さんに大変お世話になった。この場をお借りしてお礼申し上げます。